

ハイデルベルク信仰問答講解説教 50 「天の御使いのように」(2012年9月16日 礼拝説教)

【聖書箇所】

主の慈しめは世々とこしえに／主を畏れる人の上であり／恵みの御業は子らの子らに、主の契約を守る人／命令を心に留めて行う人に及ぶ。主は天に御座を固く据え／主権をもってすべてを統治される。御使いたちよ、主をたたえよ／主の語られる声を聞き／御言葉を成し遂げるものよ／力ある勇士たちよ。主の万軍よ、主をたたえよ／御もとに仕え、御旨を果たすものよ。主に造られたものはすべて、主をたたえよ／主の統治されることの、どこにあっても。わたしの魂よ、主をたたえよ。(詩編103:17-22)

こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわかまえるようになりなさい。(ローマ12:1-2)

【説教】

今日は、第49主日、問124のところを手がかりにして御言葉に聴いてまいりたいと思います。ここは主の祈りの第三の祈り「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」について教えています。「御心」というのは、神さまのお心、神さまの御意志ということです。それが天、神さまのご支配において成されていることは当然ですが、この地上においても神さまの御意志が行われますようにと祈る祈りであります。

「神さまの御意志がなりますように」ここにすでにわたしたちの祈りの常識を覆す事柄があります。つまりわたしたちは、自分の思いがなるように祈っているわけです。そういう祈りの癖がついている。しかし自分の思いではない。神さまの思いがなりますようにと祈るのです。自分の祈りを振り返ってみたい。わたしたちの祈りは随分自分勝手です。非常に自分中心であり、また困った時にだけ一生懸命祈る。それはこの世のご利益宗教の祈りと何ら変わりません。教会でもそういう祈りを見逃して、神さまは何でも聴いてくださるとか、祈り続けなければいつか叶うとか、安易にそういう言葉を口にします。しかしそれは優しさでも配慮でも何でも無い。無責任な言葉でしかありません。そういうその場しのぎの誤摩化しを平気で言うてしまうのです。

こういった甘えによって変な祈りの癖が身に付いてしまった。だからこれを修正しなければなりません。自分の思いではなく、神さまの思いこそ貫いてくださいと祈ること、そういう根本的な修正です。それがここで主イエスが教えておられる祈りの本質なのです。主イエスもあのゲッセマネでそう祈られました。

「しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」(マタイ26:39) 神さまの思いを求めるということは、そこでわたしたちは自分の思いを捨てなければなりません。自分を手放すのです。この第三の祈りでわたしたちが体得しなければならぬことはそこです。自分を手放した時に、祈りは真に祈りとなる。

まず今日の信仰問答の前半部分に注目しましょう。「唯一正しいあなたの御心に何一つ言い逆らうことなく」とありますが、わたしたちは、そのようなことは恐れ多いと考えているかも知れません。神さまの御心に言い逆らうなどできません、と。しかし度々わたしたちは御心に言い逆らうことをしているのです。どういう時か。人生に起こる様々な試練があります。病気や失敗、挫折。そういうことを経験するとき、わたしたちは神さまの御心を問うています。「なぜですか」「どうしてですか」そしてこういうことが起こるのは神さまの御心ではないと考える。もしそれが御心なら神さまはとても意地悪なお方だと考えるのです。そこでわたしたちは無意識の内にも神さまの御心に言い逆らっている。そして内心はやはり自分の思いが通ることを求めているのであります。

また、わたしたちは単に自分の思いを求めることだけに留ま

りません。更に問題なのは、自分の思いを神さまの御心と考えることさえあります。それは自分が良いことをしていると考えている時です。良い意志を持って行動し、結果が与えられた時に、「これは御心だ」ということを平気で口にするのです。しかし人間がいくら良い行いに生きていても、それがそのまま御心と言えるでしょうか。人間がどんなに良い意志をもって行動しても、この世界はどうしようもないほどに墮落しています。それは世の中のことを見れば明らかなことであります。悲しい出来事で世の中は溢れています。ですから信仰問答で「この世におけるわたしたちの最善の行いですら、ことごとく不完全であり、罪に汚れている」(問62)と言われているとおりで。その罪に汚れている人間が、どんなに良い遺志をもって行動しても、そこで自分の思いを通そうとすれば、当然、そこに衝突が起こるのです。しかもそれを「御心」と勘違いするならば、もはやその墮落は留まるどころを知りません。

例えば、今、世界では宗教間の対立が表面化しています。そこでは暴力を肯定することさえ起こります。戦争を「聖戦」とする考え方が起こります。これは神さまの御心を現すための戦いだ。そこでは人を殺すことも御心になってしまう。それは結局、自分の思いを通していただけ。自分を神としていることであります。そういう誤った信仰です。それは自分の思いをイコール神さまの御心とする。そういう罪が人間を支配しているからです。何よりわたしたちがそういう罪から救われ、根本的に新しくならなければなりません。

それが「自分自身の思いを捨て去り」という部分に示されていることです。ただここには抵抗もある。自分自身の思いを捨て去ることは、自分の意志を捨てて、何か意志のない人間になる、主体性のない、ロボットのような人間になることを思うかも知れません。しかしよく考えていただきたい。わたしたちがしゃにむに「自分の意志」と主張したところで、それが罪に支配された意志であるならば、そのような罪の人間の主体性が発揮されたところで一体何になるのでしょうか。それは先ほども言ったように、我が思いを通すことのぶつかり合いになるだけです。また自分の思いをこそ御心として傲慢に振る舞うだけのことです。

自分の思いを捨てるということはどういうことでしょうか。主イエスはペトロをいさめた時、このように言われます。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」そして「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る」(マタイ16:23-25) 先ほど、自分を手放すと言いましたが、そこでは自分を失うのではない。手放すことで得るのです。失うことで与えられるのです。そういう約束が示されている。何を求めるか。本当

の自分です。

カルヴァンは『キリスト教綱要』の中で次のように述べています。「おのれの感情を神の前で無にし、神に委ねることをしない者は、できる限り神の意志に反抗するものである。われわれはこの祈りによって、神がその決定に従ってわれわれを支配したもうために、自己を否定するように教育されるのである。それだけでなく、神はわれわれの心を無にならせて、新しい精神と新しい魂とを創造し、そのためわれわれは、神の御心と純粹に一致することのほか、いかなる欲望の衝動すらも内に覚えないうようになるのである」

「新しい精神と新しい魂とを創造し」とあります。わたしは自分を手放すことでそれを得るのです。それは御心と一つになる新しい自分です。でもそれは特別な自分ではなく本当の自分です。本来の自分。これまでの古い自分は罪の自分でありました。その罪の自分を終わらせて、新しい御心に生きる自分を取り戻すために主イエスは来てくださった。そして十字架と復活の御業を行われました。十字架で御自身の命をささげ、神さまの御心に言い逆らう罪を打ち砕いてくださいました。そして復活によって、わたしたちに新しい命を注ぎ込んでくださったのです。

ヨハネ福音書6：38-40を読みます。これ以上の説明はいりません。この永遠の命を得させるために主イエスは十字架の死をお引き受けくださり、この罪のわたしたちをそこで終わらせてくださるのです。復活によって新しい命を注いでください。新しく生まれさせてくださる。それが御心です。ローマ12：2を読みます。罪から救われ、新しくされる。そこに神さまの御心がある。

さて、その新しい命を生きるわたしたちの生活が今日の信仰問答の後半で言われていることです。主の祈りで「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」と祈ります。「地にも」御心になりますように。それは新しく御心に生きるように召されたわたしたちのこの地上における責任であります。神さまの御心に言い逆らう現実がこの地上にはあります。そこでわたしたちは生きている。でもそれに倣ってしまうのではなく、それに抗して御心を現すために生きているのです。そういう自覚が求められています。

このところに「自分の務めと召命」とあります。「召命」と訳されている言葉は「職業」という言葉です。わたしたちの職業もまた神さまの召命によって与えられているものです。信仰者はそのように仕事を考えます。「天職」という言葉があるでしょう。わたしたちはただ生活のために働くのではない。その職業を通して神さまの栄光を現す。御心を現すためにわたしたちは働く。家庭の主婦もそうですし、学生も、会社員も、それぞれにそういう地上における務めが与えられているのです。それに責任をもって仕えるにはどうしても天職、召命という信仰が必要なのです。その仕事で神さまの御心を現すのです。わたしたちの多くは、それを自分の意志でやり遂げようと、自己実現のためにしていると考えています。けれどもそうではない。わたしたち信仰者の軸足は地上ではなく、むしろ天にあります。古い自分はもう終わったのです。

信仰問答はここで意味深い言葉を使います。「天の御使いのように」天使ということです。天使は神さまの御心のためだけに仕えます。わたしたちもこの地上にあって天使のように生きているのです。ただ地上にありますから完全に御心だけに生きることは難しいでしょう。でもその自覚があるのとないのとでは全く違うと思います。わたしたちの軸足は天にあるのです。そこから離れなければ、わたしたちはまさに天使のように、御心を現すために、それぞれの務めに喜んで忠実に励むことができるのです。天使としてわたしたちを遣わしてください。このわたしを用いて、この地上にも神さまの御心を現してください。「天になるごとく地にも」と祈ることが必要なのです。

キリスト者としてこの世を生きる責任があります。なぜ自分に信仰が与えられているのか。そういうことに悩んだり、ある

いは肩身の狭い思いをすることもあるでしょう。でも全くひるむことはありません。「力ある勇士たち」と詩編にありました。神さまが御心のためにわたしたちを力ある勇士として遣わしておられるのです。家族に、職場の中に、友人たちのために、天使として仕えているのです。胸を張って、喜んで与えられた務めに生きてまいりましょう。お祈りをいたします。